
運命の分岐点

白雨 悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の分岐点

【Nコード】

N2409S

【作者名】

白雨 悠

【あらすじ】

死にたい——でも死ぬ勇氣すらない。人の役に立ったことがない。人の笑顔を見たことがない俺。

ある日、道で出会った少女を助ける。

空港までの交通費を出してあげたのだ。

しかし、それが運命の分岐点だった——

俺は自分が嫌いだった。

消えてなくなってしまうばいいと思っていた。

何のために生まれてきたのか――まったくわからなかった。

左胸が規則的に上下する。自分の鼓動を聴く度、カッターナイフでも突き刺して止めてやろうと思う。

しかし、それもできない。

死にたいけど、死ぬ勇気がないのだ。

ある日、意味もなく街を歩いていた。

「あつ……ごめんなさい」

角から飛び出してきた少女とぶつかった。

「あ、すみません……」

生きているのか死んでいるのかすらわからない顔だっただろう。

感情の抜けたかすれた声。

「困ったなあ……飛行機、間に合わない……」

「……………」

心の何処かで人助けをするチャンスだ、と思った。

しかし、俺は生まれて以来人助けなんてしたことがない。人の役に立ったことがない。

俺はここで一歩踏み出して、この少女を助けてあげることにした。これが運命の分岐点だったのだ。

「た……た、タクシー乗っていけばいいんじゃない……か？」

「で、でもお金が……」

「足りない分は……お、俺が出す……から……」

「ほ、ホント？」

少女は俺に明るい顔を向けてくれた。こんなこと、はじめてだった。

た。

人の明るい顔を見る喜びをはじめて知った。

「一人で……行けるか？」

「あ、えと……着いてきてくれますか？」

人と話すのが苦手でぎこちない話し方をする俺に、普通に話をしてくれる。それだけで嬉しかった。

「わかった……じゃあ、隣に座っていいか……な……」

「はい、ありがとうございます！」

快諾してくれた。中学校の時も高校に上がっても、気持ち悪いと罵られていたから、すごく嬉しかった。

「空港まで、ね。あいよ」

運転手は俺を不審な目で見る。

二十歳を過ぎている暗い男が、中学生くらいの少女を連れているんだ。それに、俺は気持ち悪い。

「飛行機、間に合わなくても次のに乗ればよかったんですけど、やっぱり早く行きたいですから。助けていただいてありがとうございます」

「どこに……行くんだ？」

変に思われないように、言葉を発するのにも気を使う。

「ハワイです。両親はもう向こうにいるので、早く両親に会いたいです！」

「そ、そうか。ハワイか。楽しんで……」

「はい、ありがとうございます！」

美しい笑顔だった。

それから無言のままタクシーは走り続けた。

「空港。着いたよ。2500円ね」

「あ、全額……俺が出すよ」

「そ、そんな。だめですよ、そんな……」

「いや、いいから……」

コンビニのバイトで貯めた金から払う。帰りは歩いて帰らなければいけなくなつたが、この少女を助けてあげることができたなら、それでいい。

「本当にありがとうございます……えっと……」

「いや、いいよ。それじゃ……気をつけて……」

「あ、あの！ 私……緑川綾音って言います。お暇だったら、メールくださいね。あと、これ」

そう言つてメールアドレスと電話番号を書いた紙と、手作りのキーホルダーをくれた。

「……いいの……か？」

「はい、小さいですけど、お礼です！ いらなかつたら捨てちゃってください」

「でも、誰かにあげるためじゃ……？」

「いえ、それは私が2つ持つてゐるうちの一つです。ごめんなさい、使つたもので……」

そう言つて、彼女は色違いのストラップを見せた。

「……いや、大切にするよ。えっと……あ、ありがとう」

「はい、それでは！」

少女は笑顔で小さくお辞儀をして、空港の中に入つていった。

家まで歩いて帰つた。そして、テレビをつける。

ソファに寝転び、少女がくれたあのキーホルダーを見る。

『番組の途中ですが、臨時ニュースをお伝えします。先ほど、成田空港発ハワイ行きの旅客機が海上で消息を絶つた、ということです。現在、海上保安庁と自衛隊が事実確認を行つており――』

「なん………？」

テレビに映しだされた消息地点からすると、あの少女が乗つたはずの便と同じくらいの時間だ。

「そんな……嘘だ………」

『たつたいま入つた情報です。海上で旅客機の機体の一部が見つか

り、墜落したことがほぼ確実となりました。しかし、機体の大部分は見つかっておらず、生存者がいるかどうかはまだわからない状態です——」

数時間後、乗員乗客全員の死亡が確認された。

テレビに映しだされた中に、海に浮かぶストラップの映像があった。間違はなく、俺が少女からもらったものの色違いだった。

「俺があの時助けなければ——彼女は——」

この便に乗らずに助かったはずだ。

あの時俺が助けなければ——俺がタクシーに乗れと言わなければ。彼女の未来が絶たれることはなかった——

死にたい、と思っている俺のせいで、彼女の運命は変わってしまった。

死にたいと思っている人間は死ねなくて、生きる希望を持っている人間がこんな運命になってしまった。

なら、俺は何をすれば——

しかし、なにもできない。

俺なんかには何もできることはない。

死んで償いたい。

でも俺は死ぬ勇気すらない。

受話器を取り、電話をかける。

番号は、彼女にもらったあの紙の。

『ピーッという音の後に、お名前とご用件をお話ください——』

何度かけても同じことばが繰り返されるだけ。

頬を涙が伝った。これが『悲しい』という感情なんだと、はじめて知った

（後書き）

ストーリーとして崩れている部分がありますね。
アップロードするかどうか迷いましたが、一応。

多分リメイクすると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2409s/>

運命の分岐点

2011年4月5日15時25分発行